松波むかし語り―ここに住み続けて その 12

今回のお客様

60 歳になってから絵を習い、地域の活動にも。

鎌田　辰夫さん 83 歳　4 丁目

“手を動かすのはいいこと、恥ずかしがらずに、なんでもやってみることですよ！”

ボケたくない、町を明るくにぎやかにしたい、そのために自分でできることはないかと考えてきた努力の人ですね。

鎌田さんは４丁目北の理事、そして 15 年以上にわたった民生委員をはじめ、社会福祉協議会役員を務めてこられました。その理由をうかがうと、「福祉の仕事は、子どもの時に両親を亡くしたからかなあ。人のために、自分でも何ができるかと思ってね」との答えが返ってきました。うかがったその生い立ちは、まさに戦中・戦後の日本の歴史そのものです……。

鎌田さんは昭和２年、県南部の亀山生まれ。戦前にいまのＪＲ久留里線、上総亀山駅の駅員となりました。海軍を志願しましたが、終戦の前日、８月 14 日に沖縄に向かっていた船の上で機銃掃射をあびて８カ所に被弾、熊本陸軍病院に入院しました。戦後、亀山に復員した時、巡回診療に回ってきた医師から入院を勧められ、椿森にある現在の国立病院に３年ほど入院します。「入院中、映写技師の国家試験に合格したんですが、病院の中の患者たちで自治会をつくってましてね、県内の市町村を映画をもって回りました」。それがきっかけで退院後、小岩の映画館に就職、しかしテレビの登場でお客は減るばかり。「このまま映画でメシは食っていけないと思って、古河電工に再就職しましてね。そこで図面を描いてきました」。鎌田さんは、そこで 60 歳の定年まで働きました。

町会とのお付き合いはそこから？　「そうですね、役員をしていた勝山さんに誘われて参加したんです」。町会の一番の思い出は？　「宇井会長の時代だったと思うのですが、町内の人たちにもっと町会に関心をもってもらおうと、お祭りをうんと派手にしようと力を入れたことがありました。お祭りは町民の集まれる場ですし、集まれる雰囲気をつくろうと思ったんです」。

鎌田さんはまた、絵を描くことで町会でも知られています。「絵を始めたのも定年後でした。つい働いている時の習慣で、駅まで行ってしまったことがあって、『このままではボケるな』と思ってね、月２回、轟公民館に絵を習いに通いました」と、全国各地で写生した絵を見せていただきました。「手を使うことは、脳の活性化にもとてもいいことです。『私は恥ずかしいから』じゃ何もできない。老人会でも、みんなで絵を描いたらと思います。今度町会で文化祭をやるそうですが、いいことですよね」。

最近、絵のサークルを始められた鎌田さん、まだ機銃の破片が残る体をかかえ、体調にも気遣いながらの毎日です。そばにはいつも、普段から健康管理に気を配る夫人の姿がありました。